琉球大学学術リポジトリ

近代首里の文教都市化に及ぼす移民の役割

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄移民研究センター 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): 文教都市, 資金造成, 寄付, 勧誘, 首里 キーワード (En): Education City, Saving, Contribution, Invitation, Shuri 作成者: 花木, 宏直, Hanaki, Hironao メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010098

移民研究 第 10 号　2015　23-42

近代首里の文教都市化に及ぼす移民の役割

花 木 宏 直

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．首里の概要
Ⅲ．第一中学校創立記念事業にみる移民の役割
Ⅳ．第二小学校創立記念事業にみる移民の役割
Ⅴ．首里市図書館建設事業にみる移民の役割
Ⅵ．おわりに

キーワード：文教都市，資金造成，寄付，勧誘，首里

Ⅰ．はじめに

近代日本では，海外を含む人口移動が活発化し，出身地にとどまらない多様な居住地選択がみられるようになった。近代日本からの海外移民の送出については，沖縄を事例としたものをはじめ数多くの研究蓄積がある[1)]。また，近年では，送出地域に注目し，送出世帯の社会関係や経済状況を詳細に検討した成果もみられる[2)]。しかし，既存研究では海外移民の送出経緯から移住先での生活実態までが主に検討され，送出地域と移住先との相互関係や海外移民送出後の送出地域の変化についての検討は多くない[3)]。

一方，近代日本の地域形成については，歴史地理学をはじめ数多くの蓄積がある[4)]。しかし，これらの研究の多くは，地元有力者をはじめ，出身地や当該地域に居住し続けながら，自身の利益を度外視して地域振興に貢献しようと行動する者に注目されるきらいがあった。近代日本では，海外を含む人口移動の活発化に伴う居住地選択の多様化がみられた。それにより，地域形成には地域に居住し続ける者だけではなく，一時的な訪問者や海外を含む各地を転勤する者，他地域へ転出した移民をはじめ，さまざまな住民が関与するようになった。とくに，移民は，出身地の維持発展に貢献しようとする意識をもちつつ，地域に居住し続けていては獲得することのできないアイデアや，莫大な資金の提供を通じて，地域形成に貢献し得るという点で，地域形成の担い手として重要な役割を果たしたとみられる。以上の点を踏まえ，本稿は，出身地に対する移民の役割に注目し，近代日本の地域形成のあり方を検討する。

研究対象地域として，沖縄県首里を取り上げる。首里は，近世には琉球王国の王府が設置されていたが，近代以降は県庁が那覇へ設置されたため沖縄の政治の中枢としての機能を失い，後述するように人口減少がみられた。そして，首里では 1903（明治 36）年の仙

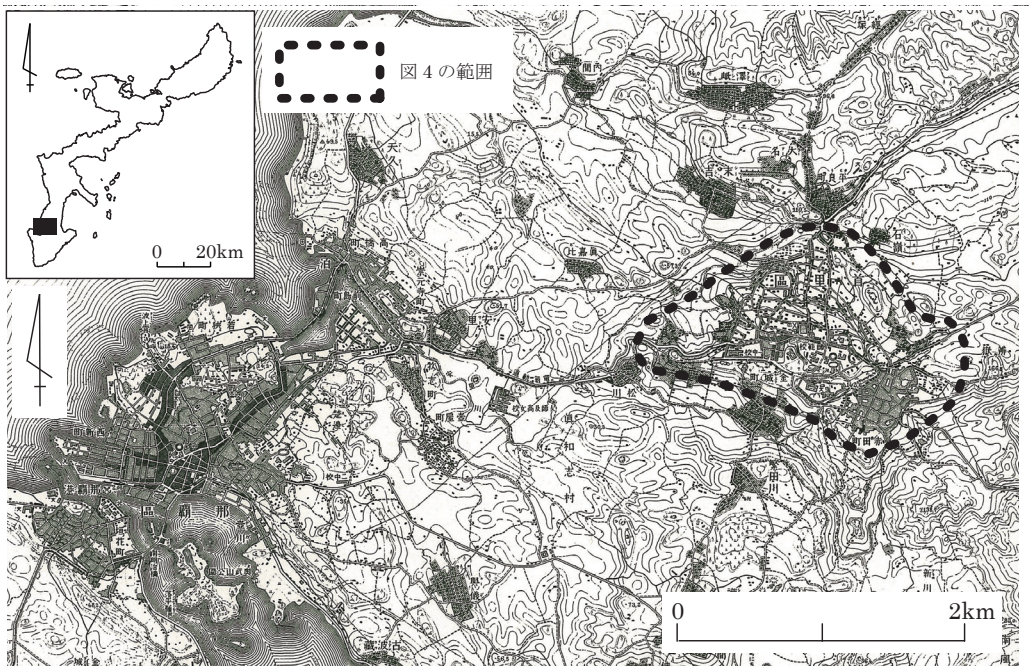

図 1　研究対象地域「首里」

資料：1/25,000「那覇」（1919（大正 8）年）をもとに作成。

台移民等の移民会社によるハワイ移民の斡旋を契機に[5]，もと士族を中心に海外各地への渡航者が増加し，移住先では会社員や中小商工業者，養豚業者等に就業していった[6]。本稿では，海外を含む多様な居住地選択が増加する中で，①近代の首里でどのような地域形成がみられたのか，②その地域形成にどのような移民が関与したのか検討する。

Ⅱ．首里の概要

1．首里からの移民送出

首里は，沖縄本島中部，現在の那覇市域の東部にあり，標高約 100 m の丘陵に立地する（図 1）。近世には琉球王国の王府があり，琉球の政治の中心地であった。1879（明治 12）年の琉球処分により沖縄県が成立したが，県庁は那覇に設置されたため，沖縄の政治の中心地としての機能を失った。1896（明治 29）年には那覇とならび首里区制[7]が施行され，1903 年と 1920（大正 9）年に区域を北部へ拡張した。1921（大正 10）年には那覇とともに首里市制を施行し，那覇市（63,541 人）に次いで沖縄県の市町村で 2 位の 30,071 人の人口がみられるなど，近代を通じて沖縄県で 2 位の人口規模をもつ都市であった[8]。1954（昭和 29）年に那覇市と合併し，現在に至っている。

図 2 は，沖縄県統計書をもとに，近代の首里の人口推移を示したものである。一部の年

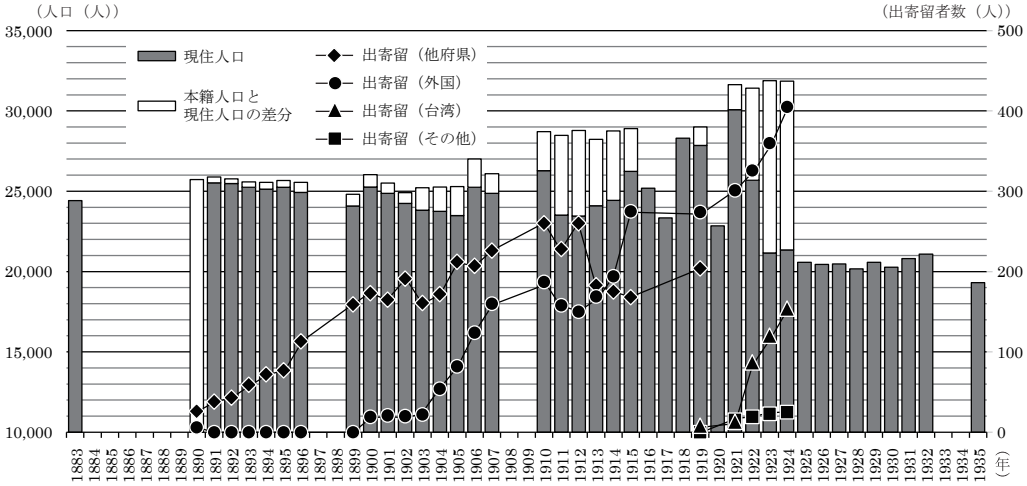

図 2　首里の人口― 1883 ～ 1935（明治 16 ～昭和 10）年―

注 1）1890（明治 23）年は本籍人口のみ判明した。　注 2）空欄には記載のないことを示す。

資料：『沖縄県統計書』（各年次）をもとに作成。

次や項目について数値が欠落していることや，数値の経年変化が不自然な年次がある，年次により掲載されている項目が異なるといった課題があるが，おおよその傾向は把握できる。これによると，首里の人口は 1883（明治 16）年には本籍人口 24,405 人，現住人口 24,422 人であったが，1924（大正 13）年には本籍人口 31,850 人，現住人口 21,344 人となり，現住人口が本籍人口を大きく下回り，転出者が増加した様子がうかがえる。1935（昭和 10）年には現住人口 19,305 人となり，大正期に市域を拡張しながらも現住人口が 2 万人以下へ減少している。一方，出寄留者数に注目すると，他府県は 1890（明治 23）年に 23 人であったが，1910（明治 43）年や 1912（大正元）年には 260 人へ増加している。外国は 1900（明治 33）年には 19 人であったが，1924 年には 405 人となり，明治中期以降増加がみられた。また，海外や日本の外地，勢力圏 [9] では台湾への出寄留者も多く，1924 年には 154 人がみられた。つまり，首里では，近代を通じて現住人口の減少がみられ，海外や日本の勢力圏下を含む各地への移住が増加した。

さらに，図 3 は，『沖縄県史』第 7 巻に収録された，赤嶺康成氏所蔵の「外国在住者調」，「県外在住者調」，「殖民地在住者調」より作成された表をもとに [10]，1935 年における首里出身者の居住地を示したものである。なお，当時の内地は府県別に，外地や勢力圏，海外は地域別に，海外は国別に集計した。この図より，居住者数の上位に注目すると，大阪 610 人，東京 118 人，フィリピン 100 人，ハワイ 88 人，台湾 79 人，ブラジル 67 人，南洋群島 46 人，神奈川 45 人，愛知 35 人，ペルー 35 人となっており，内地の都市部に加え外地や海外各地にも多数の居住者がみられた。

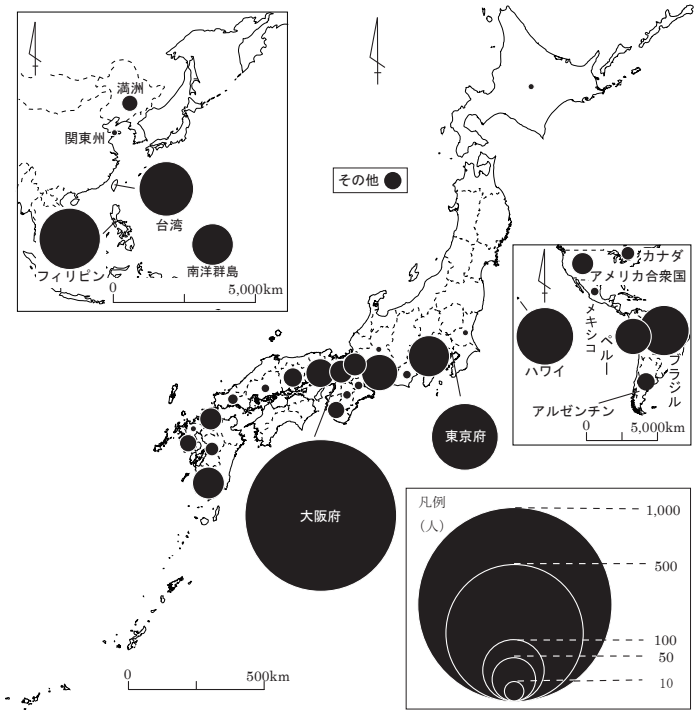

図 3　首里市出身者の居住地ー 1935（昭和 10）年ー

資料：沖縄県教育委員会編（1974）をもとに作成。

移住者の特性について，首里からの出移民が多かった地域の 1 つであるハワイに注目し検討する。表 1 は，『布哇首里市人会十周年記念誌』[11] 等をもとに，1940（昭和 15）年頃の主なハワイ移民の世帯を示したものである。『布哇首里市人会十周年記念誌』は，1940 年頃に布哇首里市人会に所属していたハワイ移民が記されており，全ての首里出身者が登場するわけではない。しかし，布哇首里市人会には多くの首里出身者が所属していたと推察されることから，首里出身ハワイ移民のおおよその動向を把握することができる。表 1 より，1906 ～ 07（明治 39 ～ 40）年を中心に，明治後期には移民会社の斡旋により多数の移民がみられた。明治期の移民 44 人の族籍や属籍に注目すると，判明したもので 18 人が士族，17 人が長男であり，士族かつ長男である者は 4 人であった。斡旋を行った移民会社に注目すると，初期には先述した仙台移民の斡旋による移民（2 人）もみられたが，会社名が確認できた 26 人のうち 9 人が明治植民で最も多かった。明治植民は，明治後期当時には首里区大中 (おおなか) に居住し，尚家家従に従事した経験をもつ士族の渡嘉敷通昆が業務代理人を務めていた [12]。大正期以降は，家族の呼寄による後続移民の比重が大きくなった。移住先での職業について，会社員のほか洋食店，商店といった中小商工業者が多くみられた。つまり，首里では，明治後期より士族ないし長男を中心にハワイ移民が

表 1　布哇首里市人会に所属する主な移民－ 1940（昭和 15）年頃－

世帯番号	本籍地	属籍	戸主名	族籍	渡航方法	生年	渡航年次	職業	同居人			
									妻	子	娘	その他
1	首里市赤平町	二男, 64父	伊舎堂盛光	士族	大陸殖民	1879	1904	死去				
2	那覇市上泉町	四男, 60父	糸満盛敦	士族	仙台移民	1873	1904	隠居	1	2	1	嫁2, 孫2
3	首里市大中町	長男	小禄良福			1883	1905	農業	1	2	1	
4	首里市真和志町		親里智明			1884	1906	商店主	1	3	1	
5	首里市山川町	二男	座波嘉宏			1873	1906	庭園師	1	1	2	
6	首里市儀保町	三男	国吉朝秀	士族	海外渡航	1886	1906	大工	1		1	
7	首里市金城町	長男	金城宏儀			1881	1906	養豚養鶏業	1	5	3	嫁1, 孫1
8	首里市崎山町	五男, 25弟	久場政善			1885	1906	理髪師	1	1	1	
9	首里市崎山町	長男	外間元良	士族	仙台移民	1888	1906	農園業	1	2	5	
10	首里市崎山町	三男	真栄城守信	士族	中国移民	1890	1906	自動車運転手				
11	首里市平良町	三男, 133弟	松本幸田	士族	大野伝栄	1888	1906	行商人	1	4	5	
12	首里市末吉町	二男	新垣栄昌			1888	1906	自動車運転手	1	1	4	孫2
13	那覇市天妃町	二男	高嶺正金	士族	三丸商会	1876	1906	マッサージ鍼灸師	1	4	5	
14	那覇市上泉町	長男	渡名喜守章	士族	明治植民	1884	1906	洋服師		1	5	
15	真和志村識名	長男, 63父	照喜名次良	士族	大陸殖民	1885	1906	養鶏業	1	2	6	
16	羽地村真喜屋	長男	亀谷長蒲	平民	晩成移民	1882	1906	養鶏業及貸家業	1	2	7	
17	石垣町石垣	長男	田島朝明	士族	晩成移民	1887	1906	合衆国移民局通訳官	1	3		
18	首里市真和志町	二男	与那嶺樽	士族	大陸殖民	1887	1907	豆腐製造業	1	3	4	
19	首里市真和志町	三男	宮里宇志	平民	中国移民	1887	1907	ダイヤモンドベーカリー店員	1	1	1	姪1
20	首里市真和志町	長男	比嘉徳三			1887	1907	ペインター業	1	1	2	
21	首里市当蔵町	二男	嘉数佐市			1889	1907	ユニオンサプライ商会員	1	3	6	
22	首里市鳥堀町	二男	安室加那	士族	中国移民	1886	1907	パインアップル耕地従動員	1	2	5	
23	首里市山川町	長男	玉城実栄	平民	大陸殖民	1881	1907	洋服裁縫業	1	3	2	
24	首里市金城町	二男	与那覇政亀	士族	明治植民	1888	1907	自動車運転士	1	3	4	
25	首里市崎山町	四男, 8兄	久場政和	士族	中国移民	1882	1907	農業	1	4	4	
26	首里市崎山町	三男	田場山戸	士族	明治植民	1887	1907	ガーデナー			4	
27	首里市赤田町	二男	比嘉栄清			1888	1907	パラマ薬店主, 薬剤師	1	1	4	
28	首里市赤田町	長男, 62兄	城間宏矩	平民	明治植民	1889	1907	洗濯業	1	3	4	
29	首里市赤田町	三男	城間得直	平民	明治植民	1890	1907	オアフ水会社員	1	2	3	
30	首里市赤平町	長男	永山盛珍	士族	明治植民	1889	1907	ユニオンサプライ会社員	1	2	3	
31	首里市儀保町	長男	喜舎場清恒	平民	明治植民	1887	1907	洋食店員	1	2	2	
32	首里市儀保町	長男	宮里政三			1891	1907	コック	1	3	2	母1
33	首里市平良町	二男, 11兄	松本幸良	士族	大陸殖民	1884	1907	行商人	1	4	4	嫁1
34	首里市平良町	二男	前原信輔	士族	海外渡航	1889	1907	ヤードメン	1	1		
35	首里市平良町	長男	玉那覇長松			1896	1907	ヤードメン	1	2	1	
36	那覇市下泉町	長男	宮城朝輔			1888	1907	商店主	1	3	3	
37	那覇市垣花町	長男, 44･54兄	仲村清正			1885	1907	ペインター業	1	5	2	
38	那覇市		島袋助祥	平民	明治植民	1887	1907	農業	1	3	1	
39	真和志村松川	長男, 53兄	新垣安宗			1889	1907	ペインター業	1	3	4	
40	美里村西原	二男, 67兄	与儀喜照			1888	1907	薬剤師	1	4		
41	首里市山川町	三男	宮里仁王			1890	1908	大工	1	2	2	
42	首里市金城町	二男	喜舎場盛仁			1891	1908	養豚業	1	4	3	嫁1, 孫2
43	首里市赤平町	四男	新垣淑義	平民	明治植民	1886	1908	パインアップル耕地従動員	1	5	3	
44	那覇市垣花町	二男, 37弟, 54兄	仲村清信			1891	1908	ペインター業	1	2	5	
45	首里市鳥堀町	三男	儀保息亮		呼寄	1899	1912	オアフ水会社員	1		1	
46	読谷山村牧原	長男	沢岻蒲戸		父と同行	1898	1913	洋食店主	1	3		
47	与那城村伊計	二男	當山善真			1886	1913	保険業	1	4	5	
48	那覇市前島町	長男	富名腰義和		父の呼寄	1900	1914	オアフ水会社員	1	4	3	
49	首里市山川町	長男	豊平良金			1899	1915	新聞記者	1	1	2	
50	首里市鳥堀町	長男	儀保息慧		父の呼寄	1902	1916	ローヤルハワイアンホテルコック	1	4	1	
51	首里市久場川町	長男	森山朝申			1897	1916	家庭奉公	1	2	4	
52	那覇市西新町	長男	久場政英		父の呼寄	1902	1916	ドライクリーニング（洗濯業）	1	5	3	母1
53	真和志村松川	三男, 39弟	新垣太郎			1904	1916	ペインター業	1		2	
54	那覇市垣花町	四男, 37･44弟	仲村清幸			1902	1917	パインアップル会社員	1		2	
55	首里市赤田町	長男	島袋　清			1905	1918	旅館業（球陽旅館）	1	1	2	
56	西原村崎原	長男	崎原盛賀		父の呼寄	1904	1918	ガーデナー	1	1	2	
57	首里市当蔵町	二男	翁長助儀		父の呼寄	1905	1919	洋食店主	1	1		妹1
58	首里市山川町	三男	名嘉原安宏			1902	1919	洋食店員	1	3	2	
59	首里市儀保町	二男	幸地朝秀			1905	1920	家庭奉公	1	3		
60	那覇市上泉町	二男, 2男子	糸満盛悦		父の呼寄	1902	1920	トラックドライバー	1	1	3	
61	具志川村西銘	長男	与世盛智郎			1894	1921	本派本願寺開教徒, 慈光園主	1	2	3	
62	首里市赤田町	三男, 28弟	城間宏登			1904	1921	自動車修繕業	1	2	1	母1, 妹1
63	真和志村識名	長男, 15男子	照喜名名章			1913	1924	ワイアラエクラブ員	1	3		
64	首里市赤平町	長男, 1男子	伊舎堂盛雄			1915	ハワイ生	内島汽船会社員				母1, 弟1
65	首里市汀良町	長男	阿嘉良雄			1915		銀行員				
66	中城村伊舎堂	長男	池原盛義			1914		ハワイアンパインアップル会社員	1			
67	美里村西原	三男, 40弟	与儀喜厚			1898		店員	1	2	1	

注 1）　渡航年月日の早い世帯順に示した。

注 2）　世帯番号は図 4 に対応する。

注 3）　空欄は記載のみられないことを示す。

資料：田島編（1940），沖縄県立図書館史料編集室編（1992・1994），沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編（1999・2005）もとに作成。

増加し，大正期以降は後続移民を呼寄せた。さらに，各地の渡航先では会社員や中小商工業者となっていった点に，首里出身者の特性がみいだせる。

2. 移民送出の増加期における首里の動向

次に，海外や日本の勢力圏下を含む各地への移民が増加する中での首里の動向に注目する。図 4 は，昭和前期の首里の景観を復原した「那覇市歴史・民俗地図（旧首里地区）」[13] 等をもとに，1936 年頃における首里の土地利用とハワイ移民送出世帯を示したものである。まず，ハワイ移民送出世帯に注目すると，図 4 の範囲では 66 戸中 24 戸が比定できた。このうち，居住者が交替したとみられる世帯が 9 戸，空家化したものが 1 戸，畑地化したものが 1 戸みられ，人口減少や地域住民の入れ替わりの多さがうかがえる。また，昭和前期の首里では雇用状況が悪く，首里市役所には 1937（昭和 2）年には首里市立公設質舗，1939（昭和 4）年には首里市職業紹介所が開設された [14]。

一方，首里には学校や図書館，資料館をはじめ文教施設が多くみられた。大正後期には，芸術家鎌倉芳太郎 [15] による首里城保存運動を受け，1925（大正 14）年に首里城正殿が国宝に指定され沖縄神社という形で史跡として保存された。1933 ～ 38（昭和 8 ～ 13）年には，円覚寺や末吉宮をはじめ関連施設も国宝に指定された。また，1886（明治 19）年に第一小学校や第二小学校，沖縄県立師範学校，1891（明治 24）年に沖縄県立工業高校が現住所へ開校し，1936 年に首里市図書館と沖縄県郷土資料館が開館した [16]。

ここで，昭和前期の首里における現状認識や将来展望について，『記念誌　沖縄県首里市・市制拾周年』の「第十章　首里市の将来」に注目する [17]。この資料は，「第一節　伝統的精神」，「第二節　経済生活の変遷」，「第三節　農工業の振興」，「第四節　教育都市の面目」，「第五節　遊覧的施設」から構成されていた。「伝統的精神」では「首里人の伝統的精神たる隣保団結の美風」の評価，「経済生活の変遷」では士族授産の失敗や戸口の減少の反省，「農工業の振興」では泡盛醸造業や養蚕業等の振興を提言している。ただし，これらの提言は，首里特有のものではなく，全国的かつ一般的な内容といえる。一方，「教育都市の面目」では首里に学校が多い現状を踏まえ，寄宿舎や教員住宅の整備といった教育環境の改善，「遊覧的施設」では首里城をはじめ史蹟の観光への活用が提言され，特徴的な内容となっていた。つまり，昭和前期の首里では，学校や史蹟といった文教施設を活用した地域振興をめざすという志向がみられた。

以上を踏まえ，首里では，大正後期から昭和前期にかけて，人口減少や海外や日本の勢力圏下を含む各地への移民の増加と，首里城の史蹟化と学校や図書館，資料館の建設といった文教都市化の進展が並行してみられた。

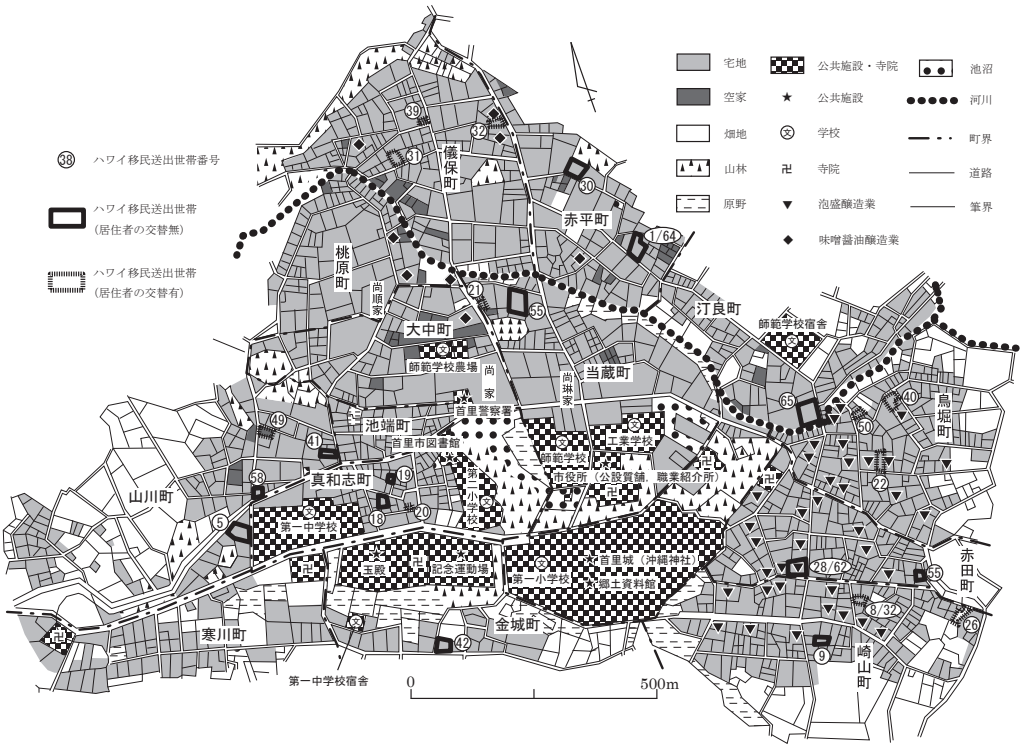

図 4　首里の概要― 1936（昭和 11）年頃―

注）ハワイ移民送出世帯番号は表 1 に対応する。

資料：「那覇市歴史・民俗地図（旧首里地区），「首里市町別番地入地図」等をもとに作成。

Ⅲ．第一中学校創立記念事業にみる移民の役割

1．第一中学校創立 40 周年記念事業

続いて，首里の文教都市化にどのような住民が関与したか検討する。はじめに，首里にあるさまざまな学校の創立記念事業に注目する。表 2 は，1920 年に行われた，沖縄県立第一中学校創立 40 周年記念事業に対して 10.00 円以上寄付をした高額寄付者を示したものである。1920 年の首里は人口減少が進行し（図 2），文教都市化の志向が成立しつつある時期に相当する。なお，この事業の主な収支に注目すると，収入は 4,932.39 円，うち同窓会からの寄付 3,178.82 円，父兄からの寄付 1,130.00 円，有志からの寄付 324.00 円，職員からの寄付 281.00 円等であり，支出は 4,932.39 円，うち同窓会基金 1,550.00 円，図書館基金援助 1,000.00 円，運動器具基金 650.00 円等であった [18]。つまり，学校の創立記念事業は，寄付を通じて学校の施設の改良や維持運営のための資金造成という特性がみられることから，既存の文教施設の維持運営への地域住民の関与のあり方を検討する上で有益である。さらに，寄付は関係者が役職に応じて相当額を支払わなければならないという義

表 2　第一中学校 40 周年記念事業への主な高額寄付者

氏名	現住所		属性	卒業年次	金額(円)
尚侯爵家	東京府	東京市	侯爵	外	150.00
喜屋武盛長	アメリカ		実業	1899	103.82
平敷安興	アメリカ		スタープロデュース農産商会	1902	
太田蒲戸	アメリカ		スタープロデュース農産商会	1904	
伊豆見元永	中国	上海市	三井支店	1910	100.00
高嶺朝申	沖縄県	首里市	八重山炭鉱株式会社社長	1888	50.00
栗国永伝	沖縄県	首里市	首里区会議員，県会議員	1903	50.00
尚　琳	沖縄県	首里市	男爵，音楽教師	1911	50.00
尚　順	沖縄県	首里市	男爵，沖縄貯蔵食品会社社長	外	50.00
百名朝計	沖縄県	那覇市	沖縄銀行頭取	1888	50.00
金城紀光	沖縄県	那覇市	医学士，元順病院	1897	50.00
岸本幸厚	沖縄県	那覇市	沖縄タイムス理事	1908	50.00
石川善盛	沖縄県	那覇市	弁護士	1909	50.00
麓　純義	沖縄県	那覇市	弁護士	外	50.00
国吉真文	兵庫県	神戸市	日本郵船デラゴヤ丸	1902	50.00
照屋　宏	台湾	台北市	工学士，台湾総督府技師	推	50.00
瀬底正敏	中国	福州市	正文洋行主	推	50.00
久志助起	アメリカ	ニューヨーク	横浜正金銀行支店詰	1906	50.00
宮城幸安	船員		機関長	1902	50.00
崎浜秀主	沖縄県	那覇市	沖縄商業銀行専務取締役，県会議員	1900	40.00
知念堅輝	沖縄県	大里村	沖縄産業銀行頭取，大里村長	1894	40.00
仲吉朝助	沖縄県	那覇市	自宅	1888	30.00
伊藤雅二	沖縄県	那覇市	池田店	1895	30.00
山城正訓	沖縄県	那覇市	那覇区長	1895	30.00
小嶺幸慶	沖縄県	那覇市	法学士，農銀専務取締役，県会議員	1900	30.00
崎山嗣朝	沖縄県	那覇市	弁護士，那覇市会議員，県会議員	1907	30.00
小沢朝蔵	沖縄県	那覇市	小沢書店主	外	30.00
翁長良保	福岡県	門司市	法学士，旭ガラス会社	1907	30.00
その他(2人)					30.00
古波蔵正栄	沖縄県	首里市	開業医	1902	20.00
胡屋朝賞	沖縄県	首里市	沖縄県立第一中学校職員	1902	20.00
安里積照	沖縄県	首里市	開業医	1907	20.00
西平守由	沖縄県	首里市	沖縄県立第一中学校職員	1908	20.00
柏　常碩	沖縄県	首里市	医師	外	20.00
魚住淳吉	沖縄県	首里市	沖縄県立第一中学校職員	外	20.00
富原守昭	沖縄県	首里市	沖縄県立第一中学校職員	外	20.00
比嘉賀学	沖縄県	那覇市	糸満馬車軌道会社	1895	20.00
伊波善思	沖縄県	那覇市	県会議員，沖縄産業銀行専務	1897	20.00
饒平名紀膳	沖縄県	那覇市	開業医	1898	20.00
金城嘉保	沖縄県	那覇市	那覇医院主	1902	20.00
屋冨祖徳次郎	沖縄県	那覇市	開業医	1902	20.00
久高喜顕	沖縄県	那覇市	開業医	1903	20.00
神村吉助	沖縄県	那覇市	開業医	1905	20.00
鉢嶺喜良	沖縄県	那覇市	開業医	1905	20.00
比嘉栄真	沖縄県	那覇市	開業医	1909	20.00
小嶺幸申	沖縄県	那覇市	自宅	1915	20.00
城間恒淳	沖縄県	那覇市	陸軍二等主計，那覇在郷軍人副分会長	推	20.00
仲地唯隆	沖縄県	那覇市	弁護士	外	20.00
山川文信	沖縄県	羽地村	開業医	1904	20.00
百名朝敏	東京府	東京市	尚家会計課長	1901	20.00
比嘉良篤	兵庫県	神戸市	三井物産支店	1912	20.00
福島重信	中国	四川省	日華製油公司	1914	20.00
桃原良弘	香港	香港市	八重山炭鉱香港支店支配人	1903	20.00
漢那憲和	軍人		海軍大佐，香取艦長	推	20.00
山川朝棟	沖縄県	首里市	沖縄銀行首里支店長	1902	15.00
新崎盛茂	沖縄県	首里市	沖縄県立第一中学校職員	1904	15.00
その他(1人)					15.00
真玉橋朝英	沖縄県	首里市	沖縄県立第一中学校職員	1916	12.00
河島雅弟	沖縄県	首里市	沖縄県立第一中学校職員	外	12.00
倉島　稔	沖縄県	首里市	沖縄県立第一中学校職員	外	12.00
福地　徳	沖縄県	首里市	沖縄県立第一中学校職員	外	12.00
小嶺幸輝	沖縄県	那覇市	死去	1902	12.00
山城盛貞	沖縄県	那覇市	八重山炭鉱技師	1906	12.00
永井吉太郎	沖縄県	那覇市	砂糖米穀商	外	12.00
城間康信	中国	上海市	三井物産支店	1910	11.00
久高友輔	沖縄県	首里市	首里郵便局長，首里区会議員	1898	10.00
高嶺朝安	沖縄県	首里市	農銀監査役	1902	10.00
玉城寛敏	沖縄県	首里市	沖縄県立第一中学校職員	1905	10.00
玉那覇有宏	沖縄県	首里市	醸造業	1907	10.00
金城良睦	沖縄県	首里市	商業，自宅	1912	10.00
譜久山朝相	沖縄県	首里市	砂糖委託商	1915	10.00
城間理王	沖縄県	首里市	醸造業	推	10.00
平良　正	沖縄県	首里市	医師	外	10.00
嵩原安佐	沖縄県	首里市	沖縄県会議員	外	10.00
河野留蔵	沖縄県	首里市	沖縄県立第一中学校職員	外	10.00
学生後援会	沖縄県	首里市		外	10.00
久高将旺	沖縄県	那覇市	歯科，開業医	1904	10.00
志喜屋孝信	沖縄県	那覇市	県立第二中学校教諭	1904	10.00
祖慶実徳	沖縄県	那覇市	開業医	1907	10.00
浦崎永揚	沖縄県	那覇市		1910	10.00
護得久朝章	沖縄県	那覇市	元沖縄実業銀行行員	1910	10.00
西平賀荘	沖縄県	那覇市	商業	1912	10.00
比嘉清繁	沖縄県	那覇市	県会議員	1912	10.00
平尾喜次郎	沖縄県	那覇市	平尾商店	1917	10.00
青山壮吉	沖縄県	那覇市	青山書店主	外	10.00
大城兼義	沖縄県	那覇市	無尽業	外	10.00
小牧藤太郎	沖縄県	那覇市	小牧商店主	外	10.00
柴田政太郎	沖縄県	那覇市	砂糖商	外	10.00
照屋林顕	沖縄県	那覇市	水産業	外	10.00
仲地紀晃	沖縄県	那覇市	医師，元順病院	外	10.00
花城永渡	沖縄県	那覇市	弁護士，衆議院議員	外	10.00
宮城普喜	沖縄県	那覇市	開業医	外	10.00
山口保栄	沖縄県	那覇市	質屋業，蒲団商	外	10.00
伊礼　肇	沖縄県	北谷村	法学士，北谷村長	1912	10.00
大城永昌	沖縄県	中城村	県会議員，村会議員	1906	10.00
山元恵孝	沖縄県	具志川村	開業医	1906	10.00
宮城源幸	沖縄県	名護村	農銀名護支金庫，県会議員	1905	10.00
上里忠勝	沖縄県	平良町	医師	1911	10.00
柴田朝雄	沖縄県	八重山郡	開業医	1907	10.00
佐伯寛泰	沖縄県		自宅	1911	10.00
呉屋良幸	熊本県	熊本市	九州学院	1913	10.00
国吉世勲	佐賀県	佐賀市	歩兵大尉，佐賀五十五連隊附	1906	10.00
久場真照	兵庫県	神戸市	欧州航路	1906	10.00
富川盛勇	大阪府	大阪市	浪速銀行	1912	10.00
崎山朝盛	大阪府		湯浅商店員	1909	10.00
高山　徹	東京府	東京市	農学士，山本農相別宅	1898	10.00
東恩納寛淳	東京府	東京市	文学士，東京府立第一中学校教諭	1900	10.00
神山政良	東京府	東京市	淀橋専売支局	1902	10.00
仲宗根玄愷	東京府	東京市	東海生命保険会社支配人	1905	10.00
国吉真俊	東京府	豊多摩郡		1909	10.00
名嘉山安忠	台湾	台北市	台北病院	1901	10.00
桃原良毅	台湾	高雄市	八重山炭鉱高雄支店支配人	1903	10.00
渡嘉敷唯績	台湾		開業医	1902	10.00
田場盛義	中国	吉林省	吉林省領事館書記生	1913	10.00
城間宏恵	中国	漢口市	開業医	1901	10.00
富原守保	中国	上海市	朝鮮銀行上海支店	1915	10.00
池間恵長	中国	厦門市	台湾銀行支店	1910	10.00
東恩納盛重	船員		郵船上海航路在勤	1906	10.00
金城盛亮	軍人		在営	1926	10.00
その他(12人)					10.00
総計					4,932.39

注 1）「推」は推薦人，「外」は卒業生以外の寄付者，その他は出身地や属性を比定できなかった者，空欄は不明であることを示す。

注 2）　総計は 10 円未満の寄付者も合わせた寄付総額を示した。

資料：沖縄県立第一中学校学友会編（1921），北米沖縄人史編集委員会編（1981）をもとに作成。

務的な側面があるものの，地域住民の中には相当額とはいえない高額な寄付を行い文教施設の維持運営への貢献度を誇示しようとする側面もみられる。寄付者に注目することで文教施設へ積極的に関与しようとした住民の属性をある程度検討可能である。

表 2 によると，寄付者のうち，氏名が判明した 117 人のうち，75.2％にあたる 88 人が卒業生であった。この他，少数ではあるが同窓会の推薦人をはじめ卒業生以外の者が含まれていた。寄付額の 1 位は尚侯爵家 150.00 円であり，もと王家が最も多額の寄付を行っていた。また，尚侯爵家の先代当主尚泰（たい）の二男の嫡子で首里在住の音楽教師である尚琳（りん）や，尚泰の四男で首里在住の男爵で農園業を経営する尚順（じゅん）も，50.00 円の高額寄付を行っていた。2 位は，平敷安興や太田蒲戸等の北米移民 3 人が共同で寄付していた。彼らの経歴についてみると，平敷は 1914（大正 3）年にロサンゼルスへスタープロデュースという農産商を創業し，1916（大正 5）年に別の白人の経営する農産商に勤務していた大田を共同経営者として雇用しており [19]，北米で農産商を経営し事業を拡大した者であった。続いて，上海市の三井支店や福州市の正文洋行，ニューヨークの横浜正金銀行支店といった，都市在住の会社員や銀行員，公務員が登場した。また，沖縄の開業医や弁護士，議員，醸造業をはじめ，沖縄県内に居住する有力者にあたる者が多数みられた。

2. 第一中学校創立 50 周年記念事業

次に，表 3 は，第一中学校創立 40 周年記念事業の 10 年後，1930 年に行われた第一中学校創立 50 周年記念事業への主な高額寄付者を示したものである。1930 年は，首里の人口減少がより進行し，Ⅱ章 2 節にて検討した「首里市の将来」にみえたように，文教都市化の志向が進展した時期に相当する。また，この事業の主な収支に注目すると，収入は 4,592.27 円，うち同窓からの寄付 2,708.50 円，職員からの寄付 778.51 円，父兄からの寄付 845.20 円，一般からの寄付 252.00 円等，支出は 4,215.57 円，うち運動場拡張事業費 1,540.68 円等となっており [20]，40 周年記念事業と同様に寄付を通じて施設の改良を行ったことが確認できる。

表 3 からわかるように，高額寄付者は創立 50 周年記念事業と同じく，大半が卒業生となっていた。寄付額の 1 位は尚侯爵家 100.00 円であったが，40 周年記念事業より寄付額が 50 円減少している。同額で，沖縄の弁護士も寄付していた。尚侯爵家の寄付額の減少の経緯について，1920 年に尚泰の長男の尚典（てん），1923（大正 12）年には尚典の長男である尚昌（しょう）が死去し，尚昌の長男であった尚裕（ひろし）は 1930 年当時 12 歳と幼少であったことから，世代交代に伴う家の衰退が推察される。また，尚琳は 40 周年記念事業と同じく 50.00 円を寄付したが，尚順は 20.00 円と寄付額が減少した。2 位以下には，40 周年記念事業と同じく，沖縄の地元有力者や都市在住の会社員や銀行員，公務員が登場した。

表 3　第一中学校 50 周年記念事業への主な高額寄付者

氏名	居住地		属性	卒業年次	金額(円)
尚侯爵家	東京府	東京市	侯爵	外	100.00
外間現篤	沖縄県	那覇市	法学士，弁護士	1898	100.00
粟国永伝	沖縄県	首里市	首里無尽株式会社社長	1903	50.00
尚　琳	沖縄県	首里市	男爵，音楽教師	1911	50.00
譜久山朝相	沖縄県	首里市		1915	50.00
照屋　宏	沖縄県	那覇市		1896	50.00
屋冨祖徳次郎	沖縄県	那覇市	屋冨祖病院，日報社長	1902	50.00
古波蔵正栄	沖縄県	那覇市	古波蔵病院	1905	50.00
前田　忠	大阪府	大阪市	鴻池信託会社	1901	50.00
宮城幸安	神奈川県	横浜市	日本郵船会社機関長	1902	50.00
翁長良保	東京府	東京市	旭ガラス会社庶務課長	1907	50.00
伊豆見元永	東京府	東京市		1910	50.00
比嘉良篤	東京府	東京市	三井信託会社幹事	1911	50.00
小波津幸秀	ハワイ		開業医	1906	50.00
その他(1人)					50.00
徳田安栗	沖縄県	那覇市	移民業	1906	40.00
岸本幸厚	沖縄県	那覇市		1908	40.00
その他(1人)					●35.00
玉那覇有宏	沖縄県	首里市	醤油業	1907	30.00
伊藤雅二	沖縄県	那覇市	池田商店主，那覇市商工会長	1895	30.00
知念堅輝	沖縄県	那覇市	産業組合連合会長	1895	30.00
饒平名紀膳	沖縄県	那覇市	波之上病院	1898	30.00
小嶺幸慶	沖縄県	那覇市	法学士	1900	30.00
金城嘉保	沖縄県	那覇市	那覇医院長	1902	30.00
久高喜顕	沖縄県	那覇市	普天堂医院，在郷軍人会沖縄支部長	1903	30.00
崎山嗣朝	沖縄県	那覇市	法学士，弁護士，代議士	1907	30.00
祖慶実徳	沖縄県	那覇市	祖慶病院	1907	30.00
真境名安行	沖縄県	那覇市	愛生病院	1908	30.00
浜田良平	沖縄県	那覇市	造船業，沖縄電気会社重役	1918	30.00
城間恒淳	沖縄県	那覇市	沖縄在郷軍人分会幹事	推	30.00
宮城安得	沖縄県	那覇市	米穀商	推	30.00
上里忠勝	沖縄県	平良町	上里病院	1911	30.00
野村安重	沖縄県	平良町	酒造業	推	30.00
謝花寛済	島根県	松江市	松江裁判所	1909	30.00
神山政良	愛知県	名古屋市	法学士，名古屋地方専売局長	1902	30.00
仲宗根忠愷	東京府	東京市	東海生命保険会社専務	1905	30.00
長嶺亀助	埼玉県	所沢町	所沢航空学校長	1902	30.00
名城嗣頼	沖縄県	那覇市	那覇新薬株式会社支配人	1908	28.08
屋宜宜貞	ペルー		移民監督	1905	28.08
平識善英	ペルー			1919	22.47
尚　順	沖縄県	首里市	男爵，沖縄土地建物会社，桃原農園主	外	20.00
久高友輔	沖縄県	首里市	首里無尽会社重役	1898	20.00
金城紀光	沖縄県	那覇市	元順病院長，政友会沖縄支部長	1897	20.00
山田有登	沖縄県	那覇市	山田医院	1904	20.00
玉城文雄	沖縄県	那覇市	若狭病院	1905	20.00
津堅房長	沖縄県	那覇市	印刷業	1905	●20.00
鉢嶺喜良	沖縄県	那覇市	鉢嶺病院	1905	20.00
宮城源幸	沖縄県	那覇市	那覇市産業組合連合会理事	1905	20.00
仲吉朝太	沖縄県	那覇市	仲吉病医院	1907	20.00
比嘉栄真	沖縄県	那覇市	堂前医院	1909	20.00
金城順質	沖縄県	那覇市		1911	20.00
伊礼　肇	沖縄県	那覇市	法学士，弁護士，代議士	1912	20.00
嘉数仁王	沖縄県	高嶺村	嘉数医院	1902	20.00
大田為正	沖縄県	中城村	中城村医	1905	20.00
神村吉助	沖縄県	具志川村	神村医院	1905	20.00
山川文信	沖縄県	羽地村	開業医	1904	20.00
吉村勝敏	埼玉県	小川町	小川高等女学校教諭	1916	20.00
久場真照	兵庫県	神戸市	日本郵船船長	1906	20.00
湊川孟猷	兵庫県	神戸市	須磨浦病院	1912	20.00
平良　加	台湾	台南市	台南市助役	1907	20.00
福島重信	中国	漢口市	三菱商事漢口支店	1914	20.00
東恩納盛重	船員		湖北丸機関長	1906	20.00
百名朝敏	死亡			1901	20.00
大浜保篤	死亡			1902	20.00
その他(2人)					20.00
その他(1人)					19.66
その他(1人)					16.85
桑江良行	沖縄県	首里市	沖縄県立第二中学校教諭	1901	15.00
稲福全栄	沖縄県	首里市	沖縄県立第二中学校教諭	1916	15.00
国吉真文	沖縄県	那覇市		1902	15.00
島袋全発	沖縄県	那覇市	沖縄県立第二高等女学校長	1905	15.00
崎山朝盛	沖縄県	那覇市	那覇駅運輸課長	1909	15.00
嘉手川重達	沖縄県	那覇市	嘉手川医院	1914	15.00
金城嘉恒	沖縄県	那覇市	那覇医院長	1915	15.00
久高唯昌	京都府	京都市	京都第三中学教諭	1903	15.00
森田孟睦	東京府	東京市	講談社	1908	15.00
仲本吉一郎	千葉県	千葉町	千葉中学校教諭	1904	15.00
与儀喜宜	台湾	台北市	台湾総督府水産試験場長	1906	15.00
渡名喜守定	軍人		海軍大尉，軍艦川内	1919	15.00
その他(1人)					15.00
安谷屋与蒲	ペルー			1922	14.04
屋宜宜俊	ペルー			1923	14.04
知名定順	ペルー			1924	14.04
内間安博	ペルー		教員	1925	14.04
与儀盛輝	ペルー			1925	14.04
小波津能勝	ペルー			1926	14.04
その他(1人)					14.04
その他(1人)					12.00
伊波盛信	ペルー			1929	11.23
謝敷宗盛	ペルー			1929	11.23
その他(2人)				外	11.23
大里校職員8人	沖縄県	大里村		外	11.00
嘉数弘栄	沖縄県	首里市	沖縄県立男子師範学校	1900	10.00
勝連盛英	沖縄県	首里市	沖縄県立女子工芸学校長	1905	10.00
山口房良	沖縄県	首里市	首里市議員，副議長	1908	10.00
糸満盛保	沖縄県	首里市		1912	10.00
城間理王	沖縄県	首里市		推	10.00
崎浜秀主	沖縄県	那覇市	那覇商業学校長	1900	10.00
与那原良知	沖縄県	那覇市	那覇市収入役	1903	10.00
志喜屋孝信	沖縄県	那覇市	沖縄県立第二中学校長	1904	10.00
安谷屋正量	沖縄県	那覇市	沖縄県工業指導所長	1906	10.00
渡久地政達	沖縄県	那覇市	沖縄県土木技師築工事務所	1917	10.00
平尾喜次郎	沖縄県	那覇市	平尾本店	1918	10.00
渡名喜守徳	沖縄県	那覇市	商業	1923	10.00
石川逢篤	沖縄県	那覇市	酒造業	推	10.00
柏　常彦	沖縄県	那覇市	沖縄県立病院産婦人科長	推	10.00
宮城安英	沖縄県	那覇市	米穀商	推	10.00
山城正忠	沖縄県	那覇市	歯科医	推	10.00
青山壮吉	沖縄県	那覇市	青山書店主	外	10.00
山田盛常	沖縄県	那覇市		外	10.00
沖縄糖商組合	沖縄県	那覇市		外	10.00
金城敬持	沖縄県	糸満町	中島医院	1915	10.00
屋比久孟徳	沖縄県	馬天村	県会議員，開業医	1912	10.00
川平朝令	沖縄県	真和志村	県立女子師範学校長，第一高女長	1904	10.00
玉城寛敏	沖縄県	中城村	中城小学校長	1905	10.00
小橋川善盛	沖縄県	中城村	開業医ヵ	1920	10.00
仲吉朝宏	沖縄県	仲里村	仲里小学校長	1902	10.00
国吉真才	沖縄県	泡瀬村	国吉医院	推	10.00
具志堅清	沖縄県	本部村	開業医，県会議員	1906	10.00
仲地唯旺	鹿児島県	鹿児島市	鹿児島地方裁判所	1914	10.00
譜久村安英	鹿児島県	鹿児島市	歩兵少佐，鹿児島四十五連隊中隊長	1914	10.00
小橋川昭慶	長崎県	長崎市	長崎刑務所長	1907	10.00
近藤文雄	佐賀県	小城町	佐賀県立小城中学校	1914	10.00
竹内一雄	岡山県	岡山市	日興証券会社ヵ	1919	10.00
糸満盛良	京都府	綾部町	海軍機関少佐	1906	10.00
東恩納寛淳	東京府	東京市	東京府立高校教授	1900	10.00
山川朝賢	東京府	東京市	東京尚侯爵家家扶	1905	10.00
瀬長良直	東京府	東京市	三越呉服店	1910	10.00
上原恵道	東京府	吉祥寺町	海軍機関中佐，三菱社員	1906	10.00
平敷安亮	樺太	豊原町	弁護士	1913	10.00
新里朝明	中国	旅順市	旅順第二中学校	1911	10.00
田場盛義	中国	上海市	上海日本領事館	1913	10.00
安里積一	メキシコ			1910	10.00
翁長助成	ブラジル	サンパウロ市	日本新聞経営	1904	10.00
百名朝計	死亡			1888	10.00
真境名安興	死亡			1897	10.00
西村助八	死亡			1902	10.00
その他(16人)					10.00
総計					3,805.70

注1)「推」は推薦人，「外」は卒業生以外の寄付者，その他は出身地や属性を比定できなかった者，空欄は不明であることを示す。
注2) ●は物品(内容不明)の寄付も行ったことを示す。
注3) ソーレスでの寄付者は，1ソーレス＝0.56169円に換算して示した。
注4) 総計は10円未満の寄付者も合わせた寄付総額を示した。
資料：川上編(1934)，与儀編(1936)，城間編(1959)，伊芸編(1986)をもとに作成。

さらに，ハワイの開業医である小波津幸秀やメキシコの安里積一やブラジルで日本新聞を経営する翁長助成，那覇市で移民業に従事する徳田安興等が登場し，海外移民の送出の増加を反映した寄付者がみられた。とくに，中位以下には，ペルー移民22人より総額530ソーレス，当時の日本円に換算して約292.08円の寄付がみられた[21]。ペルー移民の中での高額寄付者に注目すると，28.08円を寄付した屋宜宜貞は沖縄からのペルー移民が開始された直後の1906年にペルーへ移住し移民監督となり，1910年には沖縄青年会を結成して初代会長に就任していた[22]。屋宜と同じく28.08円を寄付した名城嗣頼は，1915（大正4）年に沖縄青年会が発展した沖縄県人会3代目会長となったが[23]，表3にて那覇市在住となっていることから1930年には沖縄へ帰郷していたとみられる。このように，40周年記念事業と比べ，50周年記念事業ではペルーをはじめハワイやメキシコ，ブラジルといったさまざまな国や地域に居住する首里出身の海外移民からの寄付件数や金額の増加がみられた。

Ⅳ．第二小学校創立記念事業にみる移民の役割

1．寄付者の特性

表4は，1935年に行われた，首里市立第二小学校創立50周年記念事業の主な高額寄付者を示したものである。この事業は，第一中学校創立50周年記念事業とほぼ同時期にあたり，首里の文教都市化の志向が進展した時期に相当する。また，第二小学校は，卒業生が首里の出生者に限定され，第一中学校の創立40周年や50周年の記念事業より首里の地域住民の動向を詳細に検討することができる。

表4より，発起人はすべて沖縄の地元有力者であったことが確認できる。一方，寄付額の1位は沖縄の地元有力者ではなく，アメリカの安里積一が個人で50.76円を寄付していた。安里について，詳細な経歴や属性は不明であるが，1930年にはメキシコに在住し第一中学校創立50周年記念事業へ10.00円の寄付を行ったことが確認されることから（表3），1930年以降にメキシコからアメリカへ転航して蓄財したと推察される。2位は首里市末吉町出身でフィリピンのラサン拓殖株式会社支配人である野原繁雄[24]と末吉郷友会が共同で50.31円寄付した。3位に，尚侯爵家や沖縄の地元有力者等が50.00円寄付しており，尚侯爵家の寄付額がさらに減少して海外移民を下回っていた。続いて，ペルー移民か共同で登場したほか，太田興業に勤務するフィリピン移民，布哇首里市人会長である田島朝明等のハワイ移民からの寄付がみられた。加えて，沖縄の地元有力者や都市在住の会社員や銀行員，公務員に加え，ブラジルや南洋群島の移民からの寄付も登場した。物品に注目すると，特徴的なものとして南洋トカゲやワニの標本が寄付されていた。これらの寄付者の詳細な経歴や属性は不明であるが，物品の入手先を考慮すると，南洋群島への移民と推察される。

表 4　第二小学校 50 周年記念事業への主な高額寄付者

氏名	居住地	属性	金額(円)・物品
安里積一	アメリカ		50.76
末吉郷友会，野原繁雄	フィリピン	ラサン拓殖株式会社支配人	50.33
尚侯爵家	東京府　東京市	侯爵	50.00
玉那覇精一★	沖縄県　首里市	泡盛醸造業	50.00
汀良町有志一同	沖縄県　首里市		50.00
宮古首里人会	沖縄県　宮古郡		50.00
その他(1人)			50.00
富川洋子，小波津能勝，外5人	ペルー		48.14
森田孟衍	フィリピン	太田興業株式会社勤務	35.52
田島朝明	ハワイ	合衆国移民局通訳官	33.03
宮城　亀	ハワイ		33.03
玉那覇有宏★	沖縄県　首里市	味噌醤油醸造業	30.00
譜久山朝相★	沖縄県　首里市	砂糖委託商	30.00
宮城安得★	沖縄県　首里市	泡盛醸造業	30.00
新里康保	沖縄県　那覇市	泡盛醸造業	30.00
照屋孚彰	沖縄県　那覇市	医師	30.00
翁長良保	東京府　東京市	旭硝子取締役兼総務部長	30.00
その他(1人)			30.00
喜屋武元持★	沖縄県　那覇市	米穀商	25.00
知念朝太郎	沖縄県　那覇市	医学博士，知念病院長	25.00
仲宗根樽	ブラジル		22.09
尚　順	沖縄県　首里市	男爵，沖縄土地建物会社，桃原農園主	20.00
尚　琳★	沖縄県　首里市	男爵，音楽教師	20.00
粟国永伝★	沖縄県　首里市	首里無尽株式会社社長	20.00
平良　正	沖縄県　首里市	医師	20.00
宮城盛睦	沖縄県　首里市	泡盛醸造業	20.00
真境名安行	沖縄県　那覇市	医師，愛生病院長	20.00
神山政良	東京府　東京市	国際通運社取締役，元東京専売局長	20.00
漢那憲和	東京府　東京市	海軍少将，衆議院議員	20.00
森田孟睦	東京府　東京市	講談社	20.00
湊川孟猷	兵庫県　神戸市	須磨浦療病院副院長	20.00
与儀喜宣	台湾　台北市	台湾総督府殖産局技師水産試験場長	20.00
外間安貞	満洲		20.00
その他(2人)			20.00
翁長助成	ブラジル　サンパウロ市	日本新聞経営	18.41
比嘉三良	ブラジル		18.41
又吉全興	ハワイ	又吉病院長	16.75
山城秀正	ハワイ		16.52
崎山起松★	沖縄県　首里市	泡盛醸造業	15.00
佐久本政良★	沖縄県　首里市	泡盛醸造業	15.00
伊波盛規	沖縄県　首里市	泡盛醸造業	15.00
喜屋武幸誠	沖縄県　首里市	泡盛醸造業	15.00
高安玉兎	沖縄県　首里市	首里市長	15.00
玉那覇有功	沖縄県　首里市	泡盛醸造業	15.00
宮城　牛	沖縄県　首里市	泡盛醸造業	15.00
石川逢篤	沖縄県　那覇市	泡盛醸造業	15.00
新里康毅	沖縄県　那覇市	砂糖委託倉庫業，泡盛醸造業	15.00
その他(1人)			15.00
多和田真厚	ブラジル		10.12
山城興昌	ブラジル		10.12
喜舎場朝久★	沖縄県　首里市	泡盛醸造業	10.00
照屋寛忠★	沖縄県　首里市	泡盛醸造業	10.00
富原守昭★	沖縄県　首里市	内科，小児科	10.00
西平守由★	沖縄県　首里市	首里市助役	10.00
宮城安栄★	沖縄県　首里市	泡盛醸造業	10.00
尚　真子★	沖縄県　首里市	尚順妻	10.00
胡屋信子★	沖縄県　首里市	胡屋朝賞(沖縄県立第一中学校長)妻	10.00
喜屋武幸俊	沖縄県　首里市	泡盛醸造業	10.00
幸地　亀	沖縄県　首里市	泡盛醸造業	10.00
島袋寛昌	沖縄県　首里市	泡盛醸造業	10.00
知念宏茂	沖縄県　首里市	味噌醤油醸造業	10.00
真和志町婦人会	沖縄県　首里市		10.00
工芸学校職員	沖縄県　首里市	沖縄県立工芸学校	10.00
新垣政一★	沖縄県　那覇市	喜屋武元持商店	10.00
仲井間千代★	沖縄県　那覇市	仲井間宗一(衆議院議員)妻	10.00
嘉味田朝春	沖縄県　那覇市	肥料販売並印刷業，向春商会経営	10.00
金城嘉保	沖縄県　那覇市	医師	10.00
崎山嗣朝	沖縄県　那覇市	衆議院議員	10.00
鉢嶺喜良	沖縄県　那覇市	医師	10.00
比嘉栄真	沖縄県　那覇市	医師，堂前医院長	10.00
宮城安一郎	沖縄県　那覇市	米穀商	10.00
山城興松	沖縄県　那覇市	益栄商会出張所主任，那覇農園主	10.00
川平朝令	沖縄県　島尻郡	沖縄県女子師範学校長，沖縄県立第一女学校長	10.00
神田精輝	沖縄県　国頭郡	沖縄県立第三中学校長	10.00
伊豆見元永	東京府　東京市	元三井物産社員	10.00
比嘉良篤	東京府　東京市	三井信託調査部長	10.00
山城興善	兵庫県　精道村	益栄商会代表社員，八木鉄工所社長	10.00
湧稲国安亮	南洋　テアニン島	仲本酒造店主	10.00
大湾朝幸	南洋　ポナペ島	大湾商店主	10.00
富原守保	中国　天津市		10.00
その他(21人)			10.00
小波蔵安静	沖縄県　首里市	守礼写真館主	扁額
山田　静	沖縄県　那覇市		学芸会用幕
大和屋	沖縄県　那覇市		幕
嵩原おと★			南洋トカゲ標本
金城よね			ワニ剥製標本
真栄平房知			ワニ剥製標本
金城嘉享			軸物
総計			4,715.33

注 1)　★は発起人を示す。
注 2)　空欄は記載のみられないことを示す。
注 3)　日本円ではない通貨での寄付額は，1 ドル＝ 33.03 円，1 ミル＝ 0.23 円にて換算した。
注 4)　総計は 10 円未満の寄付者も合わせた寄付総額を示した。
資料：首里第二尋常高等小学校編（1937），与儀編（1936），高嶺編（1937），大宜味編（1938），田島編（1940），城間編（1959）をもとに作成。

この事業の主な収支に注目すると[25]，収入の見込額は3,800.00円，実際の収入は4,715.33円であり，うち居住先別の寄付総額は日本3,520.40円，ハワイ408.03円，ブラジル203.38円，北米121.87円，フィリピン85.85円，ペルー53.14円，満洲20.00円，天津10.00円，一方で支出は3,744.12円，うち校旗135.00円，運動場整地145.02円，各教科設備補充1,155.66円，簡易水道116.56円等となっていた。つまり，沖縄および日本国内や日本領の居住者だけでは当初の見込額に達しておらず，海外移民からの寄付を前提とした予算が組み立てられていたことや，第一中学校の創立記念事業と同様に寄付を通じて設備の充実や施設の改良が行われていたことがわかる。

2. 移民への寄付勧誘

次に，この事業における寄付勧誘の仕組みに注目する。第二小学校では1935年6月に後援会総会を開催して記念事業を計画し，12月11日に沖縄県知事へ沖縄県内外や海外より3,800.00円の寄付金募集願を提出して，23日に寄付募集許可が下りた。1936年1月には海外へ寄付勧誘の趣意書を発送し，2月には沖縄県内の同窓会員へも趣意書を発送した。3月には布哇首里市人会より校旗および運動用具の寄付申込書が到着し，その後も他地域からも寄付が届いて準備を進め，12月に記念式典を開催した[26]。ここで，布哇首里市人会が寄付金の用途を校旗等に指定した経緯について，第二小学校の『創立五拾周年記念誌』の「校旗に就いて」には以下の記述がみられる。

> 校旗の製作に就いては考案と注文を慎重にし，始めに三越，白木屋，山形屋にカタログを送つてもらひ，それによつて撰択して見積りをたのんだ所，われわれの予想とかけ離れどうなることかと心配させられたのであります。
>
> 心配の中途にして布哇ホノルゝ首里人会より吉報が舞込みました。永久に残る品校旗を吾々の手で寄贈したいとの御消息で力を得ました。種々研究の結果左のごとき組合せで大和屋に製作を依頼したのであります[27]。

校旗の予算は，1935年6月8日に行われた後援会総会では100.00円であったが[28]，1936年1月14日に発送された趣意書では140.00円へ増額されていた[29]。つまり，当初第二小学校にて校旗の準備を進めたが，見積金額が見込み額を大きく上回り，発注に困難を生じた。その時，布哇首里市人会が校旗の寄付に名乗りを挙げ，校旗に用途を指定して寄付を行った様子がうかがえる。布哇首里市人会が名乗りを挙げた経緯については不明であるが，寄付勧誘の仕組みを顧みると，趣意書を発送した前後で，第二小学校から布哇首里市人会への働きかけがあった可能性が推察される。つまり，第二小学校創立50周年記念事業は，海外移民への寄付を前提とした予算が組み立てられ，海外移民へ寄付勧誘するこ

とで第二小学校だけでは予算超過となった校旗等の物品を購入し，設備の充実や施設の改良を行っていった。

Ⅴ．首里市図書館建設事業にみる移民の役割

1．建設の経緯

続いて，1936 年に行われた首里市図書館建設事業に注目する。この事業は，第一中学校創立 50 周年記念事業や第二小学校創立 50 周年記念事業と同じ時期に行われ，首里の文教都市化が進展する時期にあたる。また，既存の学校の創立記念事業ではなく，新規の公共施設の建設事業における地域住民の関与のあり方を検討でき有益である。

まず,『首里市図書館年報　第一輯　第三周年記念号』に収録された，首里市助役勝連盛英の記した「図書館ノ設立スルマデ」をもとに，建設の経緯を確認する [30]。この資料によれば，1907 年に首里市教育支部会が創設され，1909（明治 42）年から 1910 年頃に図書館の建設計画が登場した。しかし，建物とする予定となった首里城旧寝殿を，尚侯爵家が由緒地として買収したため，計画が頓挫した。買収の要因について，当該時期は尚侯爵家の当主で琉球処分後に東京へ移住した尚典が 1906 年に東京より帰郷した時期にあたることから [31]，尚典の隠居に伴う首里での尚侯爵家に関わる歴史的遺産の整備が行われたことが推察される。1928（昭和 3）年，昭和天皇の御大典記念として図書館建設が再事業化し，建物として首里城御番所を譲渡される予定となった。しかし，大正後期に芸術家の鎌倉芳太郎の提唱を契機とした首里城の保存運動に伴い, 1924 年に首里城正殿が国宝に指定され，1930 年からは首里城大修理が実施されたため，再び頓挫した。1936 年，首里出身で那覇に居住する旧家の山田盛常が，図書館建設資金として 5,700.00 円を首里市に寄付したことから三度事業化し，同年 11 月に第二小学校敷地内に開館した。

2．建設をめぐる移民の役割

表 5 は，開館 3 年目にあたる 1938 年までの首里市図書館への資金や書籍の主な寄付者を示したものである。まず，山田盛常が 5,700.00 円と 175 冊の書籍を寄付しており，彼が寄付の大半を占めていた。山田に続き，沖縄の開業医や弁護士，議員，泡盛醸造業主等が登場し，山田も含め沖縄の地元有力者による寄付が多くみられた。また，尚順が書籍を 59 冊寄付したが，尚侯爵家からの寄付はなくなり，尚家の関係者からの寄付がさらに減少していた。

一方，ハワイ移民より，総額 148.00 円ドル，日本円に換算して約 4,888.44 円 [32]，書籍総数 248 冊の寄付がみられた。主なハワイ移民の寄付者について，表 1 を顧みると，田島朝明は布哇首里市人会長で合衆国移民局通訳官，渡名喜守章は洋服師，真栄城守信は自動

表 5　首里市図書館への主な高額寄付者と図書や物品の寄贈者

氏名	居住地		属性	金額(円)	図書(冊)・物品
山田盛常	沖縄県	那覇市		5,700.00	175
与儀喜宣	台湾	台北市	台湾総督府殖産局技師水産試験場長	100.00	23
柏　常彦	沖縄県	首里市	医学士，柏病院長	100.00	
富原守昭	沖縄県	首里市	内科，小児科	100.00	
比嘉昌源	沖縄県	首里市	泡盛醸造業	100.00	
工芸学校職員一同	沖縄県	那覇市	沖縄県立工芸学校	79.78	
胡屋朝賞●	沖縄県	首里市	沖縄県立第一中学校長	50.00	33
古波蔵正栄	沖縄県	那覇市	医学博士，古波蔵病院長	50.00	
伊江朝助	東京府	東京市	貴族院議員	50.00	
布哇首里市人会	ハワイ			33.03	248
金城善助	ハワイ		金城歯科医院長	33.03	
田島朝明	ハワイ		合衆国移民局通訳官	33.03	
親泊政博●	沖縄県	首里市	ジャーナリスト	30.00	
勝連盛英●	沖縄県	首里市	沖縄県立女子工芸学校長	30.00	
高安玉兎	沖縄県	首里市	首里市長	30.00	
玉那覇有宏	沖縄県	首里市	泡盛醸造業	30.00	
大城朝詮	沖縄県	那覇市	官吏	30.00	
その他(3人)				30.00	
照屋孚彰，照屋孚義	沖縄県	那覇市	医師	25.00	
伊地柴本	沖縄県	首里市		20.00	
玉城尚秀	沖縄県	首里市	首里市会議員	20.00	
比嘉栄真	沖縄県	那覇市	医師，堂前医院長	20.00	
その他(5人)				20.00	
比嘉徳三	ハワイ		ペインター職	19.82	
渡名喜芳子	ハワイ		渡名喜守章(洋服師)長女	16.52	
真栄城守信	ハワイ		自動車運転手	16.52	
宮城朝輔	ハワイ		商店主	16.52	
玉城仁和	ハワイ			16.52	
湧川勝雄	ハワイ			16.52	
津堅房長	沖縄県	首里市	印刷業	15.00	円大型柱時計
稲福全成	沖縄県	島尻郡	医師，博斎堂医院長	15.00	
その他(1人)				15.00	
神谷朝延	沖縄県	首里市	薬種商	10.00	
屋嘉比柴俊●	沖縄県	首里市	首里市収入役	10.00	
米須秀智	東京府	東京市	元町小学校	10.00	
その他(2人)				10.00	
末吉安恭	沖縄県	首里市	文筆家		552
我那覇朝義★●	沖縄県	首里市			301
川平朝令	沖縄県	島尻郡	県女子師範学校長，第一高等女学校長		206
比嘉良篤	東京府	東京市	三井信託調査課長		141
神山政良	東京府	東京市	国際通運社取締役，元東京専売局長		133
沖縄県師範学校	沖縄県	首里市			120
大阪朝日新聞社	大阪府	大阪市			97
沖縄県教育会	沖縄県	那覇市			94
沖縄県立工芸学校	沖縄県	首里市			85
尚　順	沖縄県	首里市	男爵，沖縄土地建物会社，桃原農園主		59
首里市役所	沖縄県	首里市			52
島袋源一郎	沖縄県	那覇市	沖縄県教育会主事		51
新崎盛珍◆	沖縄県	首里市	沖縄県立第一中学校教諭		47
沖縄県学務課	沖縄県	那覇市			47
伊豆見元永	東京府	東京市	元三井物産社員		40
馬上太郎	沖縄県	那覇市	旭館(映画館)主		閲覧表2万枚，29
恩河朝蓄	台湾				25
勝連盛智	台湾	台北市	台湾総督府勤務		22
女子師範学校	沖縄県	那覇市			22
仲吉朝宏	沖縄県	首里市	沖縄県立郷土博物館幹事		20
藤野憲夫	沖縄県	首里市	沖縄県立第一中学校教頭		18
首里第三小学校	沖縄県	首里市			18
比屋根安定	東京府	渋谷区	青山学院教授		16
大田朝敷	沖縄県	那覇市	琉球新報社長		12
阿嘉良薫	沖縄県	首里市	バプテスト教会牧師		11
榎本信吉	沖縄県	首里市	沖縄県立第一中学校職員		11
その他(9人)					10冊以上
石塚藤兵衛	沖縄県	首里市	石塚呉服店主		閲覧表1万枚
首里無尽株式会社	沖縄県	首里市			閲覧表1万枚
沖縄書籍株式会社	沖縄県	那覇市			円中形柱時計，閲覧表2万枚
金武朝建▼	沖縄県	那覇市	沖縄刑務所職員		進貢船彫刻額面
小湾喜長	沖縄県	中頭郡	沖縄県立農事試験場技師		ソテツ外植木20本
富名腰義珍	東京府	東京市	空手師範		揮毫
安里積達					大ソテツ2株，閲覧表1万枚
与座次郎					大姿見
総計				11,750.22	3,341

注 1)　★は館長，●は設立委員，◆は役員，▼は書記を示す。
注 2)　空欄は記載のみられないことを示す。
注 3)　日本円以外の通貨での寄付額は，1 ドル＝ 33.03 円にて換算した。
注 4)　総計は 10 円未満，10 冊未満の寄付者も合わせた寄付総額や冊数を示した。
資料：首里市図書館編（1939），与儀編（1936），高嶺編（1937），大宜味編（1938），田島編（1940）もとに作成。

車運転手，宮城朝輔は商店主であった。また，田島と渡名喜は士族の長男，真栄城は士族であった。ただし，田島は八重山郡石垣町，渡名喜は那覇市，宮城は那覇市の出身であり，ハワイへ移住する以前に首里以外へ転出した世帯の子孫であったとみられる。

ハワイ移民からの寄付の経緯について，「首里市人会報」や『布哇首里市人会十周年記念誌』の図書館に関する記載に注目する[33]。首里市図書館は 1936 年に開館したが，すぐに「毎日二百名内外の閲覧者があるさうで大底の書籍は読み古した」という状況になった。そこで，「去る四月（※ 1936 年 4 月，筆者補注）に館長我那覇朝義氏から予（※布哇首里市人会長の田島）に来翰があつた，其一節に続々と刊行致す時代に適応したる新刊書を購入せざれば閲覧者に飽きを来し図書館の使命を果す事能はず，依つて郷里首里市の文化事業の為めに同市出身の各位から寄附金募集の斡旋の労を取つて呉れとの事であつた」。布哇首里市人会では役員会例会を開いて協議し寄付を決定して，1938 年に首里市図書館へ資金と書籍を寄付した。そして，図書館入口正面には「布哇ホノルル首里市人会文庫」が設置された。

なお，1938 年までの寄付の総額は 11,750.22 円，うち沖縄をはじめ日本の居住者の寄付 6,861.78 円で，そのうち山田が 5,700.00 円を占めていた。一方，ハワイ移民からの寄付は約 4888.44 円であり，彼らが寄付総額の 41.6%を占めていた[34]。また，図書館の運営予算について，1936 年は図書館の建設があったため 7,256.78 円，1937 年 1,076.00 円，1938 年 1,086.00 円, 1939 年 1,100.00 円であり, 4 年間で総計 10,518.78 円となっていた[35]。つまり，図書館の建設および維持運営は，首里の地域住民だけでは困難であり，ハワイ移民からの資金や書籍の寄付が貢献した様子がうかがえる。

Ⅵ．おわりに

本稿は，海外を含む人口移動の活発化や多様な居住地選択が増加する中で，①近代の首里でどのような地域形成がみられたのか，②その地域形成にどのような移民が関与したのかという視角から，近代日本の地域形成のあり方を出身地に対する移民の役割に注目し検討した。近代の首里では，沖縄の政治の中枢としての機能を失い，人口減少がみられた。首里からは，士族の長男をはじめ海外や日本の勢力圏下を含む各地への移住者が増加し，移住先で会社員や中小商工業者となる者が多かった。一方，大正後期以降の首里では，首里城の史蹟化や図書館や資料館の整備といった文教都市化が進んだ。文教都市化に関与した住民に注目すると，沖縄の地元有力者や，都市在住の会社員や銀行員は，大正後期から昭和前期を通じて，学校創立記念事業の運営や資金の提供をはじめ，文教都市化に中心的な役割を果たしていた。しかし，首里市図書館建設事業に顕著にみられたように，彼らだけでは資金を十分準備することができなかった。また，文教都市化には，鎌倉をはじめ沖

縄県外出身の一時的な訪問者により，首里城の史蹟化への貢献もみられた。ただし，史蹟化は結果的に図書館建設事業に停滞をきたす等，一時的な訪問者は地域住民の意向を十分与した活動ができていなかった。一方，もと王家である尚侯爵家は，大正後期以前には沖縄の地元有力者等にはできない高額寄付を行い資金造成に貢献してきた。その後，昭和前期以降は尚侯爵家の世代交代等の影響のため寄付がほとんどみられなくなり，文教都市化への関与が少なくなっていった。尚家に代わり，大正後期以降はハワイやペルーをはじめ海外移民からの寄付額が増加した。昭和前期には文教施設関係者をはじめ首里の住民が移民に対し積極的に寄付勧誘を行い，移民も希求に応えて資金や校旗，書籍等の重要な物品を寄付した。このように，近代の首里では，沖縄の地元有力者等だけでは文教施設の維持運営のための資金造成が十分できない状況に対し，尚家に代わり海外移民が寄付を求められ応じることで貢献していくという，移民を頼りにした文教都市化がみられた。

出身地に対する移民の役割は，文教都市化にとどまらない。大正後期から昭和前期の首里では，1930 年や 1934（昭和 9）年に発生した崖崩れによる死者の世帯に対し，首里の地域住民が電報でハワイに連絡し，布哇首里市人会で弔慰金を送るという対応がみられた [36)]。また，資金や物品の提供にとどまらず，移住先の流行や文化，価値観の伝達をはじめ，移民は出身地の精神的な側面にも影響を与えた可能性も高い。今後の課題として，出身地に対する移民の役割について，より多面的に検討する必要がある。

付記

本稿は，2014 年日本地理学会秋季学術大会（於富山大学）で発表した内容を加筆修正したものである。本稿の作成にあたり，資料を所蔵する各機関にはお世話になりました。記して厚く御礼申し上げます。

注

1）沖縄からの海外移民の送出についての主な成果には，①石川友紀『日本移民の地理学的研究』榕樹社，1997，や，②名護市史編さん委員会編『名護市史　本編 5　出稼ぎと移民 I　総括編・地域編』名護市役所, 2008, をはじめ自治体誌が挙げられる。最近では，沖縄からの海外移民送出の歴史的要因と 1970 年代のハワイで沖縄出身ハワイ移民一世の生活実態の聞き取りをまとめた，③鳥越皓之『琉球国の滅亡とハワイ移民』吉川弘文館，2013，がある。

2) 前掲 1) ②。

3) ①石川友紀「新聞記事にみる明治期沖縄県における移民事象」南島文化 34，2012，169-187 頁，や，②石川友紀「新聞記事にみる大正期沖縄県における移民事象」移民研究 8,

2012，57-79 頁，③石川友紀「新聞記事にみる昭和戦前期沖縄県における移民事象」沖縄地理 12，2012，57-67 頁，には，新聞記事を通じた移民から出身地への送金の実態が明らかにされ，送出地域と移住先の相互関係の一端を把握でき興味深い。また，文化人類学では，海外を含む各地への移民の送出から送出地域と移住先の相互関係を総合的に検討した研究（④長坂　格『国境を超えるフィリピン村人の民俗誌　トランスナショナリズムの人類学』明石書店，2009）や，出身地へ帰郷した移民の生活実態を解明した研究（⑤大川真由子『帰還移民の人類学　アフリカ系オマーン人のエスニック・アイデンティティ』明石書店，2010）をはじめ，近年成果が蓄積されてきている。

4) 近年の成果として，①山根　拓・中西僚太郎編『近代日本の地域形成　歴史地理学からのアプローチ』海青社，2007，②石井英也編『景観形成の歴史地理学 — 関東縁辺の地域特性 —』二宮書店，2008，③清水孝治『近代美濃の地域形成』古今書院，2013，等がある。また，歴史地理学会では，2011 ～ 12 年度の共同課題として「近代日本の歴史地理・再考」をテーマとし，研究史の総括や新たな資料の活用の提案，新たな理論の導入等が議論された。

5) 花木宏直「明治中～後期の沖縄県における移民会社業務代理人の経歴と属性」沖縄地理 13，2013，1-16 頁。

6) 石川友紀「沖縄自由移民の社会的地理学的考察 — 旧首里市の場合を例として —」人文地理 22-1，1970，82-101 頁。

7) 区制とは, 近代前期の沖縄県と北海道に施行された制度であり, 自治権が市よりも弱かった。1921 年に沖縄県，1922（大正 11）年に北海道で市制が施行され消滅した。

8) ①首里市役所編・発行『記念誌　沖縄県首里市・市制拾周年』1931，13-25 頁。現住人口については，②沖縄県編・発行『大正十年　沖縄県統計書　第一編（内務之部）』1923，39-40 頁，も参照した。

9) 本稿では，蘭の定義を踏まえ，日本国の領域を「内地」，台湾や関東州，朝鮮，樺太，南洋群島といった植民地政庁があり外地法令が適用されていた地域を「外地」，満洲や華北をはじめ日本の影響力が強い地域や国を「勢力圏」と表記する（蘭　信三「序 — 日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学をめざして」（蘭　信三編『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版，2008），xi-xxxix 頁）。

10) 沖縄県教育委員会編･発行『沖縄県史　第 7 巻各論編 6　移民』, 1974, 20-25 頁, 34-69 頁。

11) 田島朝明編『布哇首里市人会十周年記念誌』布哇首里市人会，1940。

12) 前掲 6)，7 頁。

13) 那覇市歴史博物館所蔵。

14) 前掲 8) ①，社 1- 社 4 頁。

15) 鎌倉芳太郎は，1898（明治 31）年に香川県で生まれ，東京美術学校を卒業した。1921 ～ 23 年には沖縄県女子師範学校の美術教員となり，1924 年以降は沖縄の芸術や歴代宝

案，首里城等の発掘といった調査に従事した。紅型作家であるとともに美術史研究者であり，首里城の保存運動をはじめ沖縄の芸術や文化の振興に寄与した（①原田あゆみ「鎌倉芳太郎の前期琉球芸術調査と美術観の変遷」沖縄芸術の科学　沖縄県立芸術大学附属研究所紀要 11，1999，25-137 頁，②粟国恭子「近代沖縄の芸術研究 2― 鎌倉芳太郎と比嘉朝健・琉球芸術研究の光と影 ―」沖縄芸術の科学　沖縄県立芸術大学附属研究所紀要 20，2008，21-42 頁，③与那原恵『首里城への坂道　鎌倉芳太郎と近代沖縄の群像』筑摩書房，2013，等）。

16) 文教施設の開設年次は，那覇市市民文化部歴史博物館編『那覇市史 別巻　那覇市政年表・総索引』那覇市，2008，を参照した。

17) 前掲 8) ①，第 10 章 2- 第 10 章 15 頁。

18) 沖縄県立第一中学校学友会編・発行『養秀　創立四十周年記念号』，1921，54 頁。

19) 北米沖縄人史編集委員会編『北米沖縄人史』北米沖縄クラブ，1981，62-63 頁。

20) 川上喜綱編『養秀　第三十五号』沖縄県立第一中学校学友会，1934，創立五十周年記念事業収支決算書（頁の記載なし）。

21)1932 年 5 月以前のレートを参照し，1 ソーレス＝ 0.56169 円にて換算した（「国勢クラブ」編輯部編『列国々勢年鑑　昭和九年版』国勢社，1935，162 頁）。

22) 呉屋　勇「沖縄県人会沿革」（伊芸銀勇編『ペルー移民 75 周年記念誌』ペルー沖縄県人会，1986），91-92 頁。

23) 前掲 22)，92 頁。

24) 海外研究所編・発行『現代沖縄県人名鑑』，1938，80-81 頁。

25) 首里第二尋常高等小学校編・発行『創立五拾周年記念誌』，1937，94-123 頁。

26) 前掲 25)，34-36 頁。

27) 前掲 25)，49 頁。

28) 前掲 25)，34 頁。

29) 前掲 25)，38 頁。

30) 首里市図書館編・発行『首里市図書館年報　第一輯　第三周年記念号』，1939，17-19 頁。

31) 楢原友満編『沖縄県人事録』沖縄県人事録編纂所，1916，492 頁。

32) レートは，前掲 25) にて，日本円とドルの双方が記載された寄付額から換算した。

33) ①「布哇首里市人会報」8，1937，8 頁，②前掲 11)，296-297 頁。

34) 前掲 30)，67-68 頁。

35) 前掲 30)，8-11 頁。

36) 前掲 11)，295 頁。

（はなき　ひろなお・琉球大学教育学部講師・歴史地理学）

The Role of Emigrants in the Development of an Education City in Modern Shuri

HANAKI Hironao

Faculty of Education, University of the Ryukyus

（Historical Geography）

Key words：Education City，Saving，Contribution，Invitation，Shuri

Emigration has increased in modern Japan. Many people who have left their hometowns have become involved in developing them from afar. This article examines patterns in the role of emigrants in the development of their former hometowns in modern Japan. This article focuses on the Shuri area in Okinawa prefecture. Okinawa is one of the prefectures in modern Japan from where many people have emigrated. First, I survey the patterns behind the development of modern Shuri. Next, I examine who contributed to the development. In modern Shuri, the center of government in Ryukyu-Okinawa was lost and this led to population decrease. Many people, including the samurai's oldest son, emigrated to become office workers or shop managers. Further, Shuri was developing its "Education City" by authorizing the use of Shuri Castle for conducting cultural heritage activities and building a library and a museum modeled in the late Taisho era style. Many people living in other areas were involved in the development of the Education City in Shuri. First, influential residents of Okinawa, office workers, and bank clerks living in the urban areas of Japan played a significant role in building the Education City by organizing and contributing to schools' memorial events. However, they could not contribute enough in terms of money. Next, visitors from outside Okinawa, such as the artist Kamakura Yoshitaro, contributed to authorizing the use of Shuri Castle for cultural heritage activities. However, construction on the Shuri city library was stopped because of a lack of initiative. Thus, residents of Shuri alone could not complete it. Third, the Sho royal family had contributed significant funds for the preservation of education facilities, before the late Taisho era. However, their contribution decreased in the later generations after the early Showa era. Emigrants in Hawaii, Peru, and other areas contributed more money than the Sho royal family after the late Taisho era. In the early Showa era, residents of Shuri, especially educational facilities, invited emigrants to contribute actively. Emigrants accepted the invitation and contributed money, school flags, books, and other supplies to schools and the Shuri city library. Thus, Okinawans alone could not raise enough money for the development of educational facilities. Emigrants contributed money in response to the invitation from Shuri residents. In conclusion, the development of the Education City in modern Shuri depended significantly on the contribution made by emigrants.